

ジェンダーとは、性の生物学的な側面（セックス）に対して、社会文化的に作られた性を意味する。このことばはいまでは一般でも知られるようになってきているが、その一方で、アカデミズムの内外を問わず、さまざまな立場からの論争は絶えない。

なかでも最大の論点は、性差はどこまで社会文化的に作られているかである。とくに妊娠・出産という生物学の特徴によって、男女は本質的に区別されるという見方は根強い。たとえばジェンダー・フリーということがしばしば物議を醸すのは、それが男女の違いをすべて社会文化的な産物とみなし、性差の撤廃は可能であるという主張に見えるからだろう。

しかし、世界を見渡すと、そうした身体の差違でさえ、社会文化によって認識のされ方が違うことがわかる。たとえばニューギニアには、男女の違いを生殖器ではなく体液によって判定する社会がある。そこでは女性は、月経や母乳などが豊富な時期に女性とみなされるのであって、閉経後は男性に近くなり、男性の領域にも出入りが可能になる。一方、子どもは母の体液にまみれて生まれてくるので、男子も生まれたときには女性的に扱われる。しかし、成人式のときに身体を傷つけて血を流し、それまでの女性的な体液を外に出したり、他の成人男性の精液などをこすりつけ、男性的な体液を体に取り込んだりして、男性の体液が増えると男性になる。そして、結婚して妻との性交渉をおして精液などが減少するにしたがって、次第に女性的になるとされている。

## ジェンダー Gender

宇田川 妙子 うだがわ たえこ 民博 民族社会研究部

いまさら聞けない  
人間学の  
キーワード

たしかに妊娠・出産は、普遍的に女性の身体的機能である。しかしそれは、わたしたちの社会においても、女性の生活や人生の一部でしかない。そうした生物学的な特徴を、どのように認識し、利用し、強調あるいは軽視するかは、やはり社会文化によって異なるし、歴史的にも変化する。

そもそもジェンダーという視点には、男性や女性にかんする議論にとどまらない可能性がある。かつて人類学でも、ある社会や民族を考察する際には、事実上、その社会の男性たちを念頭に置いていた。女性たちは、人類学者アードナーが指摘したように、外部の研究者のみならず内部の男性、さらには女性たち自身によっても「沈黙させられ」、見えづらくなっていた。ゆえに、ジェンダーという視点から浮かび上がってきたのは、女性たちの姿や声だけでなく、社会というものが、そうした女性たちをはじめとするさまざまな人たちの存在を含んでいるという現実である。しかも、同じ女性同士であっても、もちろん男性同士でも、年齢、世代、階層などによって違いがある。そして一人の女性にも男性にも、複数の顔がある。つまりジェンダーとは、わたしたちの社会がじつはさまざまな差異に満ち、だからこそダイナミックな豊かさを宿していることに気づきつけかけのひとなのである。

にもかかわらず、社会がしばしば同質的なものとみなされてしまうのはなぜなのか、そこにはどんな力がかかわっているのか、わたしたちはこれからも考え続けていく必要があるだろう。